校長室だより

共学共高

第31号

令和４年９月21日発行

発行責任者
白梅学園高等学校長
武　内　　彰

「集団での学び」への挑戦

国語科のＭ先生が担当する、２年８組「現代文Ｂ」の授業にお邪魔した。「時間と空間に関する評論文（大学入試問題）」を題材にして、多肢選択問題の正答をクラス全体で導いていく授業である。

Ｍ 先生が「扱うテーマが、時間と空間になります。皆さんは時間とは何か？と聞かれたら、どのように答えますか。まずは自分で 30 秒間考えてください。」と投げかける。その後、ペアで考えを出し合う。Ｍ先生が３名ほど生徒を指名して、全体で共有していく。生徒からは、「時計で刻まれるもの」「生きていられる区切り」「私たちがとらわれているもの」「流れ」など自らの感覚に基づいた考えが出される。私も自分で考えてみた。心の中で「過去から未来へと連続する不可逆的な時の流れ」とつぶやいてみる。「おおよそ、物理学を学んできた者の回答ではない、国語的な回答だ」と自評した。Ｍ先生は、国語辞典での解釈を紹介し、また自然科学雑誌には「出来事や変化を記載するための基礎的な概念」とあったこと、さらには分野ごとに定義が異なることを紹介していく。

続いて次の発問が投げかけられる。「子どもの頃の時間は長く感じたのに、大人になると時間を短く感じるのはなぜか？」生徒たちは自分で考えた後、ペアで考えを出し合い、全体の前で発表する。「やることが増えて集中するから短く感じるのでは」「子どもの時には経験することがすべて新しいことだけれども、大人になって就職すると、大きなイベントもなくなるから」といった考えが出され、クラス内では笑い声も漏れる。Ｍ先生からは、７歳の子どもと 70 歳の大人とを比較し、１年という時間の重みの違い（７分の１と 70 分の１）や、大人になると同じ体験の繰り返しが多く、脳の海馬で記憶しなくなる」ことが紹介される。

その後、Ｍ先生は、電子ボードにスライドを提示して、体内時計、生物学的時間（ネズミとゾウの心拍数）、宗教における時間（死が終わりであるか、そうでないかによる違い）、客観的な時間、哲学的な時間について情報提供し、「大切なことは、いろいろな感じ方がある、ということを押さえておきましょう。」と生徒たちに伝える。

ここで、入試問題本文の問 1 を考える。まずは 4 分間で生徒たちが自分で 4 つの選択肢のうち、どれが正答であるかを考える。本文中の「定時法的時間の概念」について正しいものを選ぶ問である。4 分間が経つと、生徒たちは先生の指示に応じて、iPad 内のアプリケーションを開き、正答だと考える選択肢の番号を記入する。クラス全員の解答状況が電子ボードに映し出される。M 先生が「選択肢 2 と 4 に分かれているようですね。それではいつものようにグループになって、それぞれの根拠を本文から探しましょう。」と投げかける。生徒たちは 4 人グループになって、考えを出し合う。その後、指名された A さんが発表する。A さんは、選択肢 1，3，4 が誤答である根拠を示し、最終的に 2 が正答であることを告げる。見事に正解だ。集団での学びの場面の大切さを感じる一コマである。

続いて、問 2 である。傍線部「時計を見るその経験」が何を表現しているのか、4 つの選択肢の中から正答を選ぶ問である。先ほど同じように、各自で正答だと思うものを選び、全員の選択状況が一覧になってくる。この問いは難しいのか、生徒たちの選択が特定の選択肢に集中しておらず、分かれているようだ。M 先生が、「傍線部を含む、一文が問いになっていると考えてみてください。」と投げかける。生徒たちは再び 4 人グループになって意見交換する。残念ながら、ここでチャイムが鳴った。M 先生が、次の時間に発表する生徒を指名し、「すぐに発表してもらうからね！」と伝えて授業が終わる。

生徒たちはペアでもグループでもしっかりと話し合いをしている。こうして友達の考えに触れながら、自分では気づかない視点を見つけたり、友達の考えに納得したりしている様子であった。参観している私もそうだが、生徒たちは授業時間の経つのを短く感じているのではないか。先生が読解を与えて、解説するのは容易である。しかし、生徒たちに考えを引き出して先生が到達させたい読解へと導くことは、難しいことだ。M 先生は、そこに挑戦してくれている。

本時の授業を踏まえて、私なりに分析すると、生徒たちが授業時間を短く感じるのは、（集団での学びの場面の時間）/（授業時間 50 分間）の数値が大きくなる場合かな、と考えた。最もそれほど単純なものではないのが、授業である。授業は生き物だからだ。

（共学共高とは：本校のディプロマポリシー（育てたい生徒像）の一つで、「共に学び、共に高め合う」生徒の姿を表す）